

作物名：りんご
病害虫名：紫紋羽病（病原：*Helicobasidium mompa*）



写真 りんご樹の地際部に形成された子実体（菌糸膜）

1 被害の特徴と診断のポイント

- 根が侵されることで樹体生育が不良となり、葉や果実の小型化、新梢伸長の悪化、地上部の萎れなどの症状を示す。
- 症状が悪化すると、葉が黄変して早期落葉し、最終的には枯死する。
- 地上部の症状は白紋羽病とほぼ同じだが、本病害の場合、地際部に赤紫～赤褐色でフェルト状の子実体（菌糸膜）を形成することがある。
- 白紋羽病と異なり、本病で急激な萎ちよう枯死することは少ない。
- 枯死樹の根を掘り上げると、根部の表皮が侵され崩壊している。根部表面に、赤紫色でフェルト状の子実体（菌糸膜）がみられる。
- 地上部に症状がみられた時点で根部がかなり侵されており、回復は難しい。

2 伝染源・伝染方法

- 果樹、野菜、花きなどの多くの農作物を始め、樹木類も侵す多犯性の土壌病害である。
- 土壌や発病作物を介して伝染する。
- 菌核や子実体は不良な環境条件に強く、土壌中で数年間は生き残っている。
- 本病菌の生息は、地表面下2mまで観察されている。

3 発病しやすい条件

- 土壌中に未分解有機物が残っていると、本病原菌の栄養源となる。
- 本病原菌は酸性土壌を好むため、火山灰土壌では発生が多い。
- 雑木林などの開墾ほ場や、前作で本病の発生が確認されたほ場。
- 火山灰土壌や砂質土壌で、乾湿の激しい土壌条件。

4 防除方法

- 早期発見が重要となる。
- 発生が疑われる樹の周囲を掘って根の状態を確認する。枝挿し法による簡易診断を行ってもよい。
- 未熟堆肥や未分解有機物を土壌にすき込まない。
- ただし、せん定枝チップの地表面施用は、本病の発生を助長しない。この場合でも、土壌にはすき込まないこと。

- 発病した根などは取り除き、園外に持ち出して処分する。
- 発病樹は、摘果や強せん定などを行って樹勢低下を抑制し、本病に登録のある殺菌剤を使用する。
- 枯死樹を処分する場合は、土壌中の根をなるべく取り除き、土壌消毒を行う。
- 肥培管理によって適正な樹勢を維持するように努める。

5 出典

(1) 参考文献

- 農業総覧原色病虫害診断防除編第5巻（農山漁村文化協会）
- インターネット版 日本植物病害大事典（全国農村教育協会）
- 仲谷ら（2001）「リンゴわい化栽培における紫紋羽病の早期・簡易診断法と防除」（岩手農研セ研報 2:99-130）
- 「りんご剪定枝チップの地表面（全面及び樹冠下）施用は白紋羽病及び紫紋羽病の発生を助長しない」（青森県普及に移す研究成果・参考となる研究成果（果樹） 平成25年度指導参考資料）

(2) 写真

- 宮城県農業・園芸総合研究所撮影
- 宮城県病虫害防除所撮影

（令和8年1月作成）